

2. 教育学部、教育学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 7)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 8)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

第3期中期目標期間の科研費については、年平均で基盤研究（A）2.7件、並びに基盤研究（B）8.7件が採択されている。科研費以外の外部研究資金についても、多額の競争的研究資金などを積極的に獲得している。これらの研究活動の成果として、著書や査読付き論文などが発表され、学会賞など21件の受賞がある。

〔優れた点〕

- 研究分野により、著書とりわけ単著が重要である分野と、論文とりわけ査読付き学術雑誌への掲載が重要である分野があるが、いずれの場合も多くは多くの教員が精力的に研究成果の公表を行っており、中には毎月1点以上のペースで著書または論文を公刊している教員、単著や編著書を次々に公刊している教員もいる。また、第3期中期目標期間中に11名（のべ21名）の教員が学会賞などを受賞している。
- 教育学研究科教員の多くが科研費に申請して採択され、学会活動において中心的役割を果たしている。第3期中期目標期間中、年平均で基盤研究（A）では2.7件、基盤研究（B）では8.7件の補助金を得ていることから、研究活動の活発さと能力・意欲の高さを示すとともに、多くの教員が、研究集団を組織し、引率するコミュニケーション能力の高さや協調性を有することを示している。科研費以外の外部資金も積極的に獲得し、それを教育・研究に還元し、成果を出すという好循環を形成している。

〔特色ある点〕

- 研究科の学際教育学研究拠点として、新時代の教育課題に取り組み、その成果を国内外に発信していくことを主な目的として、平成29年4月にグローバル教育展開オフィスを設置した。同オフィスを中心として平成30年4月より、「新しい理論的・実践的基盤に立った教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開」をテーマにしたプロジェクトをスタートさせた。このプロジェクトでは、日本の教育を支えてきた文化の仕組みをグローバルな視点から問い直すことによって、教育の新しいグローバル・スタンダードの構築と、それに基づく教育モデルの可能性を、理論・実践の両面から探究しようとしている。
- 教育実践コラボレーション・センターが主催または共催した研修会・公開ワ

ークショップ・公開シンポジウム等が、平成 28 年度から令和元年度にあわせて 15 件開催された。また、研究科附属臨床教育実践研究センターが主催または共催した一般向けの公開講座等が、同期間中にあわせて 15 件開催された。これらのほか、研究科の各講座やグローバル教育展開オフィスが主催した講演会・ワークショップ・シンポジウム等が、同期間中にあわせて 37 件開催された。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 特筆すべき高い質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、6 件、3 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、特筆すべき高い質にあると判断した。

国際的な雑誌に掲載されている研究成果を含んでいる。特に、「ヒトの脳と心の創発・発達原理の解明と未来環境設計」では、平成 28 年度に Nature Human Behaviour 誌に掲載され、多くのメディアでも取り上げられ、生物としてのヒトの心的特性についての科学的理解を深めており、学術的に卓越している研究業績である。

また「メディア文化学の体系化と新しいメディアリテラシーに向けた研究」では、平成 30 年度に第 72 回毎日出版文化賞（人文社会部門）を受賞し、この研究成果に含まれる著作に関する書評が多くのメディアに掲載されており、社会・経済・文化的な面においても卓越している研究業績であると判断した。